



今日は明日の昔

岡田 安弘

5月1日、令和の時代に入った。その4日後、ひとつ歳を重ねる。‘元号狂騒曲’は耳障りだが、戦前に生まれ、昭和、平成、令和と我ながらよく生き延びたものだと思う。

振り向けば世話になった人ばかり。それぞれの性格やクセが思い浮かぶ。悪口大好き人間、あわて者に慎重派、電話魔もいる。とつおいつ思案して、はたと気付く。自分の性格を知らない。こんな事を思うのは初めてだ。

子どものころ、父の知人から「笑わん子やなあ」と言われた。近所のお婆さんからは「お節介やきやなあ」と言われた。はっきり覚えている。それだけで性格を決めつけるにはデータ不足というものだろう。成人してからの自分を知りたい。

性格は本人には見えないものらしい。他人は見ているに違いない。付き合いの長い女友達に聞いてみた。「自分大好き人間やね」と一刀両断される。「相手の気持ちが分からない面もあるわよ」と追加されたのには参った。そんな事あったっけ? 「じゃまくさがり」という返信もあった。これ以上は聞く気が失せる。

自分の事は自分です、と誓ったのは定年後。親から叱られた子のように本当だ。嫁は体調のせいで、私とは食事の内容が異なる。常に2セット作っていた。残業や付き合いで、食べるかどうかわからない晩めしを30余年、用意してくれた。もう手間はかけたくない。自炊しようと決める。

枚方市の高齢者料理教室に通う。男女混成クラスだった。専業主婦とおぼしき人が、手際よくレシピをこなしてしまう。仲間の元小学校教師が嘆く。「悪気はないのやが、主婦は手が動くのやろなあ。これではこちらが何も身につかない」。

男だけのクラスがあると分かり、元教師と2人で編入。「爺さん同士のママゴトやなあ」。隣の麻雀教室の生徒に、ひやかされる。

ニンジンの千切りが思い出せない。包丁を手に

立ち尽くす。「このあいだ教えてたでしょう」。先生が駆け寄る。あきれられながらも、事情があつて退会するまでの7年は続けた。

決めたことは実行する。この性分だけは自覚している。やらない、と決めていることもある。ガスレンジと風呂の掃除だ。近くの銭湯に通う。そこが廃業した。これには参った。シャワーで済ませたところ、とうとう嫁が切れる。「自分の事は自分でするなんて、よう言うわ。自分の事しかしないということやんか」。

哲学教授の甥っ子に聞いた。「叔父さんの性格をどう見ている?」。答える前に説教から始まった。学者はこれだから困る。「汝自身を知れ。ソクラテスの言葉といわれているが、正しくはソクラテスが説いたというべきだ」とのこと。「自分を知ることが哲学の目的といっても過言ではない」。これまた大層なこと。

「我思う故に我あり」。彼はデカルトの言葉を引いて、自分＝意識であると言う。「ところが、意識とは何なのかは未だに答えが出ていない。人の意識は覗けない。実は自分の意識も覗けないのです。従って自分という人間に対峙するとき、人がとれる態度は3つしかない」と言う。

ひとつは、不可解だからあきらめて死ぬ。明治時代のこと、第一高等学校生が「不可解」と書き置きして入水自殺した例を挙げる。2つ目は不可解だから考えても仕方ない、と忘れて生きる。3つ目が哲学者の態度で、不可解だからこそ最後まで問い続けるそうだ。とんでもないテーマに首を突っ込んでしまった。

甥っ子が「叔父さんはどうします?」と聞いてきた。応えは決まっているではないか。不可解なんて考えても仕方ない。「忘れることにした」と返信。

こんな言葉を思い出す。室町時代の古謡は、流れる年月について「昨日は今日の古(いにしえ)、今日は明日の昔」と謡ったそうだ。いま風に言えば、人生は今日の積み重ねという事なのだろう。

くじ運はともかく、他の運は良い方だったと思う。一日、一日、運の無駄遣いをしないようにしたい。